【580】

氏　　名　藤田正勝（ふじた まさかつ）
学位(専攻分野)　博　士　(文　学)
学位記番号　論文博第391号
学位授与の日付　平成12年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　経験・言葉・表現
——日本哲学史研究の試み——

論文調査委員　(主査)教授 長谷正當　教授 薗田　坦　教授 岩城見一

論文内容の要旨

本論文は序章，および本論9章，ならびに付論からなる。

本論文は，経験と言葉，そして表現を主題とするものであるが，その根底にあるのは，日本哲学史研究の可能性，つまり日本哲学史の研究はいかなる意味で，またいかにして可能であるかという問いである。日本の哲学は結局西洋の哲学の解釈ないし解説に終わっているのではないかという批判に対して，あるいは逆に，日本の哲学者の思惟は西洋の哲学者のそれと本質的に異なっているのではないかという疑問に対して，いかに答えることができるのかという問いが本論文の根底にある。

「序章　日本の哲学？—他者との対話としての哲学—」では，そのような批判や疑問を問題にし，論者の視点からそれへの答えを試みる。論者は，日本の，あるいは東洋の思想的伝統のなかに，西洋のそれとは異なったものが，つまり「知」を単に「知」の枠組みのなかにおいてではなく，むしろその根底から問題にしようとする伝統があると考える。そして，そのような異他性は，哲学的な思惟を阻むものではなく，むしろそれこそが対話を，そして内実のある哲学的思惟を可能にするのではないかと考える。「日本の」哲学が本論文の主たる研究対象であるが，そのことによって論者がめざしているのも，まなざしを「日本」に限局することではなく，むしろそれを〈対話の場〉へと開くことである。序章ではこのような本稿の根本にある意図が論じられる。

「第1章　純粋経験—西田哲学が問うもの—」では，西田幾多郎が西洋の哲学との対話（対決）を通して問題にしたものが何であったのかを主題にする。世界をそのものとして観察し，把握する主観と，どこまでも対象として把握される客観という二元論的な構図が，事柄をとらえる一つの枠組みであることを指摘し，そのような構図の手前に立ち戻ること，言いかえれば，二元論的な枠組みのなかで理解された「知」の根底へと遡源し，そこに出会われる直接的な経験からすべての事柄を把握しようとすることが西田のめざしたことであったという基本的な理解から論者は出発する。

西田はそれと同時に，そのような経験が判断以前の，つまり言葉以前の経験であることを主張する。しかし事柄は必ずしも単純ではない。われわれの経験には—知覚にさえも—つねに言葉が，言いかえれば，われわれが前もって獲得している「世界理解」が関与し，働き出ているからである。しかし他方，言葉が言い表すものがそのまま経験であると言うこともできない。言葉は経験の一つの側面を，あるいは一断面を言い表すにすぎない。まさにそのような経験と言葉との「あいだ」こそ，本論文の主題をなすものであるが，本章ではその問題をとりわけ〈もの〉と〈こと〉という概念を用いて考察し，われわれの経験の実相が〈ものとことの共生〉という言葉で言い表されうることを明らかにする。

「第2章　経験の哲学—『善の研究』と『精神現象学』—」の主題もそのような経験と言葉との「あいだ」に関わる。『精神現象学』と『善の研究』とは，ヘーゲルと西田の主著とも言うべき書物であるが，ともに〈経験〉を問題にするものであった。ヘーゲルの『精神現象学』は「意識が行う経験」を叙述したものであり，一方，西田の『善の研究』の根底にあったのは「純粋経験を唯一の実在としてすべてを説明してみたい」という意図であった。しかし経験ということが問題にされる文脈は両者において必ずしも同じではない。ヘーゲルが感覚による対象の直接的な把握（経験）の貧しさと言葉の真理性とを

主張するのに対し，西田は，判断以前の直接的な経験の純粋さと豊かさとを主張する。このように両者の主張を対比することによって，経験と言葉との「あいだ」を明瞭に浮かび上がらせることを本章では試みる。

「第3章　経験をめぐって—ヘーゲル・ハイデガー・ガダマー—」では，〈経験〉の概念に焦点を合わせ，ヘーゲルとの対決を通して，しかし西田とはまったく異なった観点からそれを問題にしたガダマーの解釈学を手がかりに，経験とは何かについて考察を行う。ガダマーは〈解釈〉という営みが，単なる歴史的状況の復原ではなく，それ自体が歴史的な経験であること，言いかえれば解釈者の〈先入見〉がそこに必然的に関与することを主張した。そしてそのような観点からガダマーはヘーゲルを評価する。ヘーゲルこそ，歴史と現在の生との媒介の必要性を強調した人であったからである。ヘーゲルによれば経験とはまさにそのような媒介を通して自己を普遍的なものへと高めることを意味する。そのようなヘーゲルの経験理解をガダマーは継承する。しかし他方でガダマーは，ヘーゲルが，完全な自己知とともに経験が完結し，終結すると考える点を批判する。ガダマーによれば，経験がもたらすのは，完結した普遍的な知ではなく，むしろ，他のより普遍的な視点に対して自己を開く能力である。つまり形成・教養（Bildung）は，それ自身を超出して絶対的な知へと至るのではなく，より成熟した経験のエレメント（場）を準備するにすぎない。「より開かれた経験への開放性」こそ経験がもたらすものであるというのが，ガダマーの基本的な考えであった。

「第4章　経験と言葉」では，第1章で指摘された，経験と言葉との「あいだ」が主題として取り上げられる。経験を問題にするとき，われわれはそれを二つの種類に，つまり世界を前もって獲得されている世界理解の枠組み—言葉によって織りなされた世界理解の原型—に重ね合わせ，整理していく経験と，逆にそのような世界理解の枠組みが打ち破られる経験とに区別することができる。前者においては，世界を言葉という世界理解の枠組みで整理することが問題なのであり，そこでは経験と言葉との隔たりは隔たりとして顕在化しない。それが問題になるのは，後者の経験，つまり言葉の枠を超えて事柄が事柄として輝き出るような経験においてである。そこでは平均化され，平板化された世界理解の原型としての言葉が揺さぶられる。そのような経験を前にしたとき，言葉はその力を失う。しかし言葉は，既成の世界理解の枠組みであるだけでなく，同時にそれを超えて，新たな次元を切り拓く力をもつ。それは言葉が単に機械的に聞き取られるのではなく，それを聞く者を，その創造的な表現行為に参与させるからである。そしてそれが可能であるのは，言葉が，言葉以前の未定形の意味を，言わば「地」としてその背景にもつからである。言葉がもつそのような「沈黙の背景」に本章は光を当てている。

「第5章　言葉と思索—あるいは日本語と哲学—」では，言葉の問題に焦点を合わせ，日本語の特徴と，西田の思索との内的な関わりについて論じられる。もちろん西田自身がその問題に言及しているわけではないが，全体としてふり返ったとき，両者のあいだには強いつながりがあることを論者は指摘する。まず論者は日本語の特徴を，とくに時枝文法を手がかりにして，（1）「実体－属性＝主語－述語」という枠組みから自由であるという点に，また（2）述語中心的な構造をもち，話し手の感情や評価が前面に押しだされる言語であるという点に見いだす。西田がその〈場所〉論を通して主張しようとしたのも，「自己」，あるいは「意識する意識」が，「実体－属性＝主語－述語」という枠組みのなかでは捉えられないということ，判断の包摂関係を手がかりにするとき，それは「述語の方向」に求められざるをえないということ，言いかえれば「自ら無にして自己の中に自己を映す」〈場所〉として捉えられるということであった。日本語の構造と西田の思索とのそのような内的なつながりは，「日本語で思索する」ということが哲学に対してもつ積極的な意味の一つの有り様を示している。

「第6章　生と哲学—フィヒテと西田幾多郎—」では，経験と言葉との「あいだ」は，生とその表現との「はざま」として捉え直され，その「はざま」は「生と哲学」という観点から問題にされる。そこで，生と哲学とのあいだにあるつながりに，しかも緊張をはらんだ両者のつながりにつねに目を向けつづけた思想家としてフィヒテと西田幾多郎が取り上げられる。フィヒテは一方では両者のあいだにある間隙を認めつつ，しかし他方，哲学を，最高の事実としての直観を絶対的な根拠から思惟する学として理解していた。そのように生と哲学とを必然的な結びつきにおいて見ようとする態度は，哲学を「内的生命の自覚」として捉える西田のうちにも確認することができる。西田のフィヒテに対する高い評価は，そのような両者の生と哲学との理解の共通性からはじめて理解される。

『善の研究』以後，西田は「表現」の問題に関心を寄せて行くが，「第7章生と表現」では，そのきっかけを与えたW・ディルタイとK・フィードラーの思想，およびそれと西田の思想との関わりが論じられる。西田はとりわけ『意識の問題』において，人間の意識化ないし概念化の働きをつねにすり抜けていく生の事実を，その表現ないし表出作用の理解という回り道を経て把握しようとするディルタイの解釈学に，またとくに『芸術と道徳』において，芸術の表現作用こそが，不確かで不

完全な意識のプロセスを明確な外的表現へともたらすというフィードラーの芸術論に強い関心を寄せている。その影響のもとで，西田はそれらの著作において独自の芸術論を展開している。すなわち西田は，意識のもっとも深い層に，論理的範疇を越えた「先験的感情」というものを考え，その感情の自ずからなる表出運動として芸術的創作活動を理解している。さらに西田はそのような理解を手がかりに，すべての経験，すべての実在を，それ自身のなかに発展の動力を持ち，自己展開していくもの，つまり「創造的な体系」として捉えている。その意味でディルタイの哲学，およびフィードラーの芸術論の受容は，西田の思想展開にとってきわめて大きな意味をもつものであったと評価することができる。

「第8章　哲学と文化」では，文化を人間の内的な生の表現として捉え，そのような表現の根底に—意識以前的な仕方で—存在への能動的な意志，ないし世界への能動的関与の機能が働いていることが論じられる。人間と世界とのあいだの通路づけは，そのような機能によってはじめて可能になっていると考えられる。ベルクソンはそこに，「過去の経験を現在の方向へと曲げ直して利用することのできる柔軟な知性」を見いだしているが，論者はそれを一つの〈想像力〉と解釈する。哲学にいま求められているのは，文化の根底にある，そのような創造的な想像力，およびその働きをもそのなかに収めるような視野を切り開くこと，そのような地平へと歩みでることと言える。それは一面では，哲学が哲学の外に出ることを意味する。しかしそれは単に外に出ることではなく，外から哲学の権利と限界とを自覚化することにほかならない。つまり外と内との往還を通してそれ自身のあり方を更新することが，いま哲学に求められていることであると言うことができる。

われわれはわれわれの生について，自己，そして他者の問題を抜きにして語ることはできない。われわれは「自己の過剰」と「他者の過剰」とのせめぎ合いのなかで生を営んでいる。そのような自己－他者という，生が営まれる場を「第9章自己と他者」では問題にした。具体的に取り上げたのは，ブーバー，西田幾多郎，そしてレヴィナスの自己－他者論である。ブーバーは基本的に，相互に肯定しあい，応答しあうという関わりのなかで自己と他者との問題を考える。それに対し西田の自己—他者論は二面的である。一方で両者のあいだの断絶を強調するとともに，その断絶に重ね合わせて，私と汝との相互的な応答関係が見られている。両者においては，自己と他者との関係はともに相互的な関係として理解されている。それに対してレヴィナスが強調するのは，自己と他者との「非対称性」である。他者とはレヴィナスによれば，自我の自己同一化の営みからつねにもれ出るもの，そこに包摂されない異質なものであった。そしてそのような非対称的な関係からこそ，倫理が成立することをレヴィナスは主張している。

西田幾多郎の思想はその最初の著書である『善の研究』以来，多くの人々の注目を集め，また多くの批判を受けてきた。そして現在においても，それを現代の思想状況のなかで生かす必要性がくり返し語られている。「付論西田哲学研究の歴史と現状」では，そのような西田哲学研究の歴史が現在にいたるまでたどられる。まず前半部分では，戦前西田が思索を展開しつつあったとき，その展開のさなかにおいて彼の思想に対して加えられた批評・批判をふり返り，そこで問題にされたものが何であったのかの確認が試みられる。それに対して後半では，戦後，それは同時に西田の死後ということでもあるが，そこで西田哲学がいかなる形で問題にされたのか，言いかえれば人々が西田哲学のうちに何を見いだし，何を批判，または継承しようとしたのかの検討が試みられる。あわせて西田哲学研究の現状とその諸研究に見られる特徴について論じられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，日本哲学史研究は如何なる意味で，また如何にして可能かという問いに対する答えを，「経験」と「言葉」および「表現」の問題をめぐって，西田哲学と西欧の近・現代の諸哲学との対話を試みるなかで見いだそうとするものである。

日本の哲学は西洋の哲学の解釈ないし解説に終わっているのではないかという批判，あるいは日本の哲学者の思惟は西洋の哲学者のそれと本質的に異なっているのではないかという疑問に対して，論者は，日本あるいは東洋の思想的伝統にある固有なものを，「〈知〉を単に〈知〉の枠組みのなかにおいてではなく，その根底から問題にしようとする伝統」として捉える一方，そのような日本や東洋の思想伝統の固有性ないし異他性は哲学的思惟を阻むものではなく，むしろそれこそが東洋の思想と西欧の思想との対話を可能にし，哲学的思惟を一層進展せしめるものであると考える。本論文は，このような視野のもとで西田哲学と西欧の哲学との対話を試みたものである。

西田の思索の原点は，従来，主観と客観という二元論的な枠組みのなかで理解されてきた知の根底へと溯源し，そこに出会われる直接的な経験，いわゆる「純粋経験」と云われるものからすべての事柄を把握することにある。この純粋経験は言葉以前のものとされるが，しかし，言葉を離れた経験はありえず，言葉以前の経験もうちに言葉を孕んで成り立っている。

したがって，純粋経験において問題とすべきことは，経験から言葉を捨象することよりもむしろ，経験と言葉との「あいだ」ないし「もの」と「こと」との「共生」を究明することであると論者は考える。このような観点のもとで論者は，西田と西欧の諸々の近・現代の哲学思想家との対話という形をとって，経験と言葉の「あいだ」ないしその「ふくらみ」を追求する。その際，論者が対話のうちに取り込む西欧の哲学・思想家は，ヘーゲル，ハイデッガー，ガダマー，フィヒテ，ディルタイ，フンボルト，ベルクソン，メルロ・ポンティー，フィードラー，ブーバー，レヴィナスなど実に多彩であるが，その対話を通して論者は，西田哲学が現代の思想状況に対してもつ可能性や意義を取り出している。ここに，本論文の優れた意義と価値がある。

本論文の独創的知見は以下の諸点にみられる。一つは，経験と言葉の「あいだ」を追求する論者の観点の多様性である。論者は言葉のもつ二面を通してこのあいだを追求する。われわれの通常の経験は，言葉によって枠組みを与えられることで成立するが，他方，そのような通常の世界理解の枠組みが破られ，事柄が言葉を破って輝き出るような経験をわれわれはもつ。しかし，そのような未定形の経験に形を与えるものはやはり言葉であって，その意味で言葉は経験を覆い隠すという面と，新しい経験の次元を開くという二つの面を有する。論者は，そのような角度から，西田の『善の研究』とヘーゲルの『精神現象学』とを対比し，次いで，ヘーゲル，ハイデッガー，ガダマーの思索を取り上げ，平均化され・平板化された世界理解の枠組みを与えるという面と，新たな経験の次元を開く創造的な面という言語のもつ二面を取り出し，言葉の創造的な働きが言葉以前の未定形の意味を「地」として成立してくること，創造的な言葉はそのような「沈黙の背景」のうえに成り立つことを明らかにする。

経験と言葉の「あいだ」を，論者はまた，生と哲学，生と表現の「はざま」として捉え直し，そのはざまに介入する問題を西田とフィヒテ，ディルタイ，フィードラーを取り上げて究明する。その分析において注目されるのは，一般に視覚が中心におかれてきた我々の知覚は情意と深くむすびついており，それによって人間と世界への根源的な通路が開かれることを明らかにしている箇所である。これは人間存在における「先験的感情」の領域や「想像力」のもつ位置への深い洞察に貫かれたものであって，現代の世界におけるリアリティの喪失という事態やニヒリズム状況を解明するための鍵ともいうべきものを含んでいる。

経験と言葉の「あいだ」をめぐる思索において，最も独創的な知見が見られるのは，日本語と西田の思索との内的な繋がりを明らかにした箇所である。時枝文法は，日本語の特徴を（1）「実体－属性＝主語－述語」という枠組みから自由であるという点，また（2）述語中心的な構造をもち，論理的であるよりは話し手の感情や評価が前面に出るという言語である点に見いだした。西田がその〈場所〉論を通して主張しようとしたのも，「自己」あるいは「意識する意識」は「実体－属性」＝「主語－述語」という枠組みでは捉えられないこと，判断の包摂関係で言えば，述語方向に求められざるをえないということ，言い換えれば「自己を無にして自己のなかに自己を映す」（場所）として初めて真に捉えられるということであった。西田の思索は自己把握の方向を示したものであって，日本語の構造を明らかにすることを目指したものではないが，しかし，日本語の構造と西田の思索とのそのような内的な繋がりは，日本語で思索することが哲学に対してもつ積極的な意味の一つを明示する。

論者はまた西田を，ブーバーやレヴィナスの他者論との対比においても追究している。西田の自覚論がうちに本質的に他者論を含んでいることを明らかにした考察も本論文における独創的な知見である。

日本の哲学の可能性を，広く西欧の哲学との対話において掘り起こそうとした本論文は，さらに，現代の哲学思想が抱えている諸問題に対して西田哲学が投げかけうる光をも捉えており，現代において西田哲学を如何なる方向に読むかを指し示したものとして大きな意義を有する。

しかし，この点において本論文になお望まれるところがある。論者が8章および9章において追究した想像力の問題やリアリティの剝奪の問題，自覚と他者の問題はとりわけ現代の哲学において火急の問題であり，論者がこれまで追求してきた，経験と言葉の「あいだ」に新しい位相を開くものとなっている。そして，この問題の追求は従来の西田哲学の理解の枠組みを破るところを有している。本論文において指示されている問題はさらに徹底して追求さるべきものと思われる。しかし，これは論者の今後の探求の課題となるものであって，本論文の価値を損なうものではない。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年2月28日，調査委員三名が論文内容とそれに関する事柄について試問を行った結果，合格と認めた。